ナチのシオニズム後援

ヒトラーはつねにユダヤ人の抹殺を計画していたといえるだろうか？『わが闘争』にはヒトラーの初期の考え方のいくつかが表明されている。

もし一九一四年〔第一次世界大戦開始の年〕ドイツ労働者層の精神的態度がマルクス主義によってなりたっていたら、戦争は三週間で〔敗北して〕終わっていただろう。ドイツはその最初の兵士が国境をまたぐ前に崩壊していたにちがいない。実際は否であった。当時ドイツ国民が闘い続けたという事実は、マルクス主義の妄想がドイツ人の心の奥底まではなお食い込めなかったことを証明している。しかし、大戦が経過していく中でドイツの労働者・兵士が再びマルクス主義の指導者の手中にまさにはまっていくにつれて、祖国は彼らを失っていった。戦争開始時に、さらにその後戦争が続く中で、あらゆる階層出身の、あらゆる職業から構成された、最良の労働者数十万人が、戦場で毒ガスの犠牲にならなければならなかったのであるが、もし一万二千か一万五千そこらのユダヤの民族破壊分子どもを毒ガスの中にかわりに放りこんでいたとしたら、前線での数百万の犠牲すべてが無駄で犬死にということにはならなかったにちがいない。[7]

しかし、こうした考え方は、一九三三年のヒトラーの政権掌握以前にはけっしてナチスの大衆アジテーションの基礎にはなっていなかった。そのかわりナチ党が何より集中したのは、勝利のあかつきにはユダヤ人に何をするかということよりもむしろユダヤ人を非難することであった。しかし、数十年間「ユダヤ人よ、パレスティナへ行け！」はヨーロッパの反セム主義のスローガンだったから、ナチの宣伝家たちも国内のアジテーションでそれを用いた。一九三二年六月、最大の反ユダヤ集会をシュレージエンのブレスラウ〔ブロツワフ〕で開いた時の中心的シンボルも、対ユダヤ人用で「パレスティナ行きの準備をせよ！」と書いた巨大な旗であった。[8] 一九三三年四月一日の反ユダヤ・ボイコットの間、百貨店でピケをはっていた連中は、ユダヤ人に見える通行人に「パレスティナ行き片道」乗車券の模造切符を配った。[9] 反ユダヤ・ボイコットを宣したナチの公式マニフェストは、国外の反ナチ感情が掻き立てられたのも「ユダヤ人に反対する国に対してなら諸外国をこぞって煽り立てるという、一八九七年にシオニスト指導者ヘルツルの発表した綱領にもとづいて行動しようとした」国際ユダヤ人のこころみによるものである、と宣言した。[10] しかし、こうした宣言は、少しも自ら本気で信じこんでいるものではなく、まさに言葉だけは過激な反セム主義をあらためて表明したものにすぎなかった。ヒトラーは権力を握るまでは、権力掌握後の対ユダヤ人政策をどうするかについて全然真剣に考えていなかった。『わが闘争』で述べた内容以上のことで、最も親しい部下に対してもユダヤ人に究極的に何を計画しているかを明かしたという事実を示すものは存在しない。結局、ヒトラーがつねにこぼしていたように、平均的な親衛隊員は、根が穏やかなのに、余計なことを喋る人間であった。もしユダヤ人の絶滅について云々する者がいても、ヒトラーは「善いユダヤ人もいる」という弁明を必ずおこなったし、絶滅論者はいったいどこにいる、ということになった。その上、資本家は彼らなりに国外にユダヤ人とのビジネス関係を有し、教会も存在していたのであり、宗教倫理からしても殺人の正当化は考えられなかった。ヒトラーは自分の問題ではないかのごとく無視することで解消をはかり、適当な政策への道をナチ党と政府のあらゆる部署にそれぞれ勝手に手探りさせることになった。これは不可避的に相争う分派をたくさん作り出した。つねにあからさまなテロル政策を信奉する者も

多かった。国外でユダヤ人と数々のコンタクトをもつ者によってだけでなく、ユダヤ人がドイツ国内経済に深く根を降ろしていると見ていた他の人びとによっても反対されながら、テロル信奉者が数の上では優っていた。ゲットー化をただちにはかろうとする党派もかなりあったが、同じ規模の異論グループがこれに対立していた。出国政策は唯一の明確な解決法であったが、どこへ出国させるかが問題であった。大量のユダヤ人出国自体、他の国々の首都間でのドイツ・ベルリン評価を下げることになるのみならず、世界の他のどこかの首都に膨大な数のこのユダヤ人が到着すればどういう事態になるかも問題であった。したがって世界各都市はユダヤ人に対してだけでなく他の市民に対しても反ナチ・ドイツ宣伝を煽ったし、ドイツの貿易に対して各国が与える影響も当然破局的なものになると考えた。シオニスト機構、サム・コーエン、ドイツ・シオニスト連合が誰よりも先に移送協定案をもってナチスの前にあらわれたのは、まさにこうした状況においてであった。

ハーヴァラはナチスにとっていくつかの明らかな利点を有していた。ユダヤ人がパレスティナに向かえば、ただ他のユダヤ人には不平をいうことができるだけということになる。事実このドイツ・ユダヤ人はパレスティナでは反ナチへの抑制効果さえもつことになる。ナチスをして移送協定を帳消しにさせるようなことにでも万一なれば、ドイツのユダヤ人の縁者たちにさらに悪い帰結がもたらされかねないという不安は、パレスティナへ赴いたユダヤ人に大々的アジテーションの展開を躊躇させることになったのである。しかしハーヴァラ協定の最も重要な効用はプロパガンダ効果だった。ナチスは、残忍な暴力以外にこれまで何らユダヤ人政策をもちあわせないと中傷していた外国の勢力に対しても今やこういう別の方策があると示すことのできるものを獲得したのであった。一九三三年一〇月二四日、ヒトラーは、ユダヤ人に対して現実に恩恵を施しているのは私であって、私を批判している連中ではない、と大得意で次のような演説

をおこなっている。

> イギリス国民は、すべての被抑圧者、わけてもドイツを去ったユダヤ人を歓迎する、と確言している。……しかし、もしイギリスが自らのこの大きなジェスチャーを千ポンドの呈示金〔パレスティナ入国の最低必須条件〕に依存させていなかったなら、さらに洗練されたものになるだろうに（本来イギリスは誰でも入国を認めます、というべきなのだ）。我々ドイツ人は不幸にして三〇年間そうやってユダヤ人の入国を無条件で認めてきたのである。我々も、イギリス同様、千ポンドあるいはそれ以上持ち合わせがなければ誰もドイツ入国を認められないと宣言していたとしたら、今ごろユダヤ人問題などありえなかっただろう。かくしていま一度我々のような野蛮な民族のほうがよりヒューマンな存在であることを証明したのだ――おそらくは外に向かっての口先ばかりの抗議ではなく、少なくとも我々の行動のかたちで！　そして今回も我々は依然寛大な措置をとり、我々が持っているよりもはるかに高い生存の可能性をユダヤ民族に与えているのである。[11]

ナチ・ドイツは総統の意志を法的効力をもつものとみなし、ヒトラーがいったん宣言をおこなうと公然と親シオニズム政策を展開していった。すでに九月には当時バイエルン州法相で、後にはポーランド総督をつとめたハンス・フランクがニュルンベルク党大会で、ユダヤ人にとってもキリスト教徒にとってもユダヤ人問題の最良の解決は、パレスティナをユダヤ人の民族的郷土にすることだ、と述べた。[12] さらに一〇月にはハンブルク・ズュート米船舶会社が「ハンブルクのラビの厳重な監督下で処理されたコシェル・フード」をハイファまで船で運んで提供する直接的サーヴィスもはじめた。[13] ユダヤ人はまだ彼らを受け入れ

てくれる国ならどの国でも赴くことができたが、今やナチ宣伝家にとってはパレスティナがユダヤ人問題解決の恰好の出国先となったのである。しかし、ドイツ教育大学のグスタフ・ゲンターがきわめて慎重に注釈していたように、シオニストもなおユダヤ人ということであった。

ロシアは共産主義国家としては我々ナチス国家にとって危険な存在であるが、現在は友好関係を有している。それとちょうど同じように、今後もユダヤ人がつねに我々の敵であり続けることを我々は弁えているが、もし独立国家として彼らが自らを確立すれば、我々のユダヤ人に対する態度は友好的なものになろう。[14]

もしこれで十分でなければ、子供用の遊び「ユダヤ人出ていけ！」が、ナチスのシオニズム観をあますところなく示して幻想を払拭させるゲームになった。駒は中世ユダヤ人風に棘つき帽子を被せられたポーン、プレーヤーはダイスを振ってポーンを動かす。勝った子供のユダヤ人駒は、まっさきに城壁に囲まれた都市のゲートをくぐって「パレスティナへ向け出発！」と走り出る。[15]そういうゲームである。シオニストはナチ・ドイツでは蔑まれたが、彼らが、パレスティナで必要な資本を得たいと望んでいる以上、ナチのパトロネージ（後援）を極度に必要としており、ハーヴァラとそれに続く一連のパレスティナ折衝のすべてが国家レベルの協定成立にきっと導く、と自らに言いきかせたのであった。

「国家の総意が我々の願望と結びついて彼らを導くのだ」

一九三四年には、親衛隊がナチ党内でいちばん親シオニズム分子になっていた。他のナチスは、ユダヤ人への親衛隊の対応を見て「ソフト（柔軟）」という言い方さえした。フォン・ミルデンシュタイン男爵が六カ月間のパレスティナ訪問を終えてドイツに帰ってきたときには熱烈なシオニスト・シンパになっていた。親衛隊保安部（SD―親衛隊情報組織）のユダヤ人問題課の課長として、このミルデンシュタインは今やヘブライ語を学びはじめ、ヘブライ語のレコードを蒐集しはじめた。かつての旅の道連れで彼のガイドもつとめたクルト・トゥーフラーがミルデンシュタインの職場を訪れた時には、聞き慣れたユダヤ民謡のメロディーによって迎えられたほどであった。[16]部屋の壁にはシオニストの数の急増ぶりを示すドイツの国内地図も掲げられていた。[17]フォン・ミルデンシュタインは約束を守る男であった。パレスティナの入植地で見聞したことすべてを好意的に書いて紹介しただけでなく、ゲッベルスを説得してこのナチ党一のプロパガンダ・リーダーの主宰する宣伝機関紙『アングリフ（攻撃）』にも（一九三四年九月二六日から一〇月九日まで）堂々一二回にわたる報告シリーズを掲載させた。パレスティナにおけるシオニストたちの下での滞在は、この親衛隊隊員ミルデンシュタインに「世界を何世紀もの間苦しめた傷、ユダヤ人問題を癒すための唯一の方法」を教えたのだった。よきユダヤ人のその足下にある一定の大地（ボーデン）がユダヤ人にどんなに生気を吹き込んだかはまさに驚嘆に値した。「大地は一〇年のうちにユダヤ人を革新しユダヤ人のあり方を改善した。この新しいユダヤ人は新しい民族になるであろう」[18]このミルデンシュタインの旅を記念してゲッベルスは、表が鍵十字、裏がシオニストの星というメダルをつくらせた。[19]

一九三五年五月、当時親衛隊保安部長で、後に悪名高いチェコ（ボヘミア・モラヴィア保護領）「総督代